研究主題「自発的な活動としての遊びの中で諦めずにやり遂げることにつながる経験を通して、自信をもって行動する幼児の育成
―『自立心』を中心に架け橋期の幼児の成長を捉え、共有する過程の工夫―」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
江東区立第五砂町幼稚園　主任教諭　橋本　瑠里子

第１　研究のねらい

「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」（中央教育審議会初等中等教育分科会　幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会,2023）では、近年の幼児を取り巻く社会情勢が変化し、予測困難な時代を生き抜くために必要となる生きる力の基礎を育むためには、生涯にわたる人格形成の基礎を培う幼児教育と小学校教育との円滑な接続が重要であると示されている。そのためには、保育者と小学校の教員が子供の成長していく姿を共有することで、子供の発達や学びの連続性を確保し、「幼児期及び架け橋期（５歳児から小学校１年生の２年間）の教育の質を保障していくこと」が求められている。

幼稚園教育要領（平成 29 年告示）では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の１つである自立心は「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。」と示され、幼児期に育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿であり、生きる力の基礎を培う上で大切であることが述べられている。

こうした姿は、自分がやりたいことを選んで行動し、満足感を味わうなどの体験を積み重ねていく中で育まれると、幼稚園教育要領解説（平成 30 年３月）で示された。そのため、幼児自身が自分のやりたいことを選んで行動することが多い、自発的な活動としての遊びの中で自立心を捉えることが有効であると考えた。

自発的な活動としての遊びの中での自立心は、幼児一人一人の発達の実情や場面に応じた姿となって表れるため、保育者によって捉え方が異なることがある。そこで、各保育者が捉えた幼児の自立心に関する姿を共有し、適切な指導につなげることが必要である。

本研究では、架け橋期の幼児の成長について、自立心を中心として共有する過程の工夫に焦点を当てる。そして、自発的な活動としての遊びの中で諦めずにやり遂げることにつながる経験を通して、自信をもって行動する幼児の育成を研究のねらいとする。

第２　研究仮説

保育者が自立心の表れを自発的な活動としての遊びにおける幼児の具体的な姿として捉えて共有し、その姿につながる効果的な援助や環境の構成をしていくことで、幼児は諦めずにやり遂げることにつながる経験を積み重ねることができ、自信をもって行動するようになるだろう。

第３　研究の内容と方法

１　基礎研究

(1) 平成 29 年度教育研究員報告書から、幼児が自信をもって行動するようになるために必要な経験を積み重ねるための援助の分析・考察をした。

(2) 所属地域の小学校第１学年におけるスタートカリキュラム実施期の授業を観察し、児童が安心して行動するための、学びの連続性を意識した教員の取組を考察した。

２　調査研究

(1) 調査の概要

ア　幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を保育者間や小学校教員と共有することに関して保育者の意識調査を行う。（都内公立幼稚園、公立保育園、幼保連携型こども園の保育者 122 人）

イ　児童の幼児教育施設における経験を生かした取組等について、小学校第１学年担任の経験がある教員の意識調査を行う。（都内公立小学校 10 校 67 人）

(2) 調査結果

ア　保育者間での共有

保育者間で幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を共有することについて、63.9％の保育者が難しさを感じていることが分かった。

具体的には、保育者の思いや捉え方の違いを理解し合うこと、幼児の具体的な姿や課題をイメージすること、幼児の姿が実情や場面に応じて変化することなどが、難しさを感じる要因となっていることが明らかになった。

また、自立心に関しては 43.4％の保育者が共有することに難しさを感じており、他の項目と比較して、より難しさを感じているという実態が明らかになった（図１）。

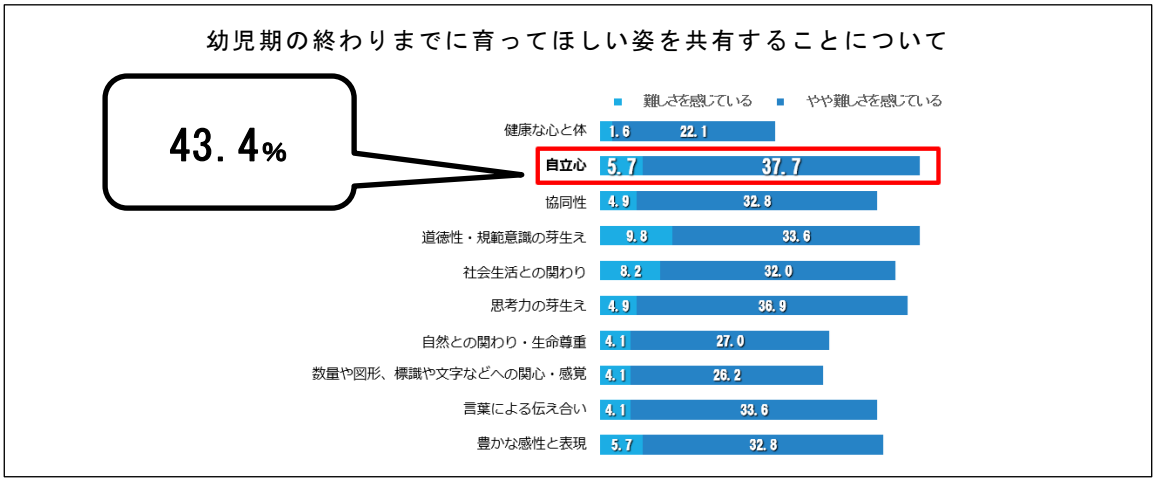

図１　保育者間での共有（n=122）

イ　保育者と小学校教員の共有

保育者と小学校教員との間で幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を共有することについて難しさを感じている保育者の割合は、82.8％であった。

幼児教育を通した幼児の成長を小学校教員に分かりやすく伝えること、幼児期の終わり

までに育ってほしい姿を共通の手掛かりとして使用すること、互いの教育を理解することが、難しさの要因となっているという実態が明らかになった。

また、5 歳児の保育を参観したことがある小学校教員において、自発的な活動としての遊びである好きな遊びの時間に、小学校教育につながっていると感じられた保育者の指導や環境が見られたと感じた教員の割合は 19.3％であった。

ウ　考察

調査研究の結果から､｢保育者間で､遊びの中で表れる幼児の自立心の具体的な姿を捉え、共有の過程を工夫すること」と､｢小学校教員との連携において幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりとして幼児の実態を共有すること」に課題があると考えた。そこで自立心を捉えるための視点を設定し、幼児の実態や成長を共有しやすくするための「自立心捉えシート」を開発する。

３　開発研究

○　「自立心捉えシート」（図２）の特徴

ア　自信をもって行動するようになるために必要な経験が分かる。

イ　幼児の具体的な姿に対して､必要な保育者の援助が分かる。

ウ　具体的な幼児の姿から自立心を捉え､保育の前後に保育者間で共有する時に活用する。

エ　小学校との引継ぎや連携教育の協議などでも参考資料として活用する。

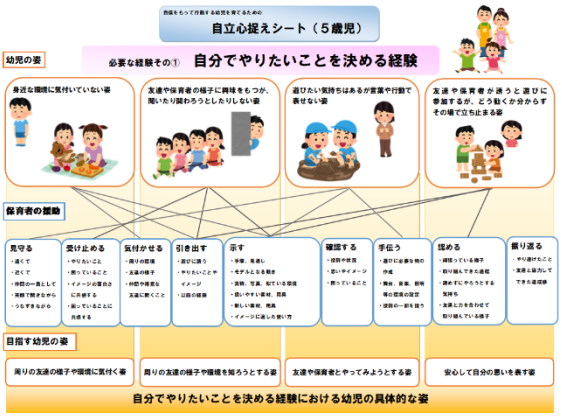

図２　自立心捉えシート

４　検証保育（令和６年９月 27 日～11 月 22 日、全６日間実施）

都内公立幼稚園５歳児学級における自発的な活動としての遊びの中で、幼児が自信をもって行動するようになるために、諦めずにやり遂げることにつながる経験を積み重ねられるよう、検証保育を実施した。「自立心捉えシート」を用いて「自立心」を中心に幼児の姿を保育者同士で共有しながら援助を行うことで、目指す幼児の姿の実現に向けて保育者の援助が有効な手だてとなっているかを検証した。

(1) 検証保育前

ア　事前の行動観察で、自信をもって行動するようになるために必要な経験をする機会が少なかった複数の幼児を対象児とした。次に示すのは、自信をもって行動するようになるために必要な経験と、経験を積み重ねることで現れる目指す幼児の姿である（表１）。

表１　自信をもって行動するようになるために必要な経験と目指す幼児の姿

自信をもって行動するようになるために必要な経験	目指す幼児の姿
①　自分でやりたいことを決める経験	・周りの友達の様子や環境に気付く姿 ・周りの友達の様子や環境を知ろうとする姿 ・友達や保育者とやってみようとする姿 ・安心して自分の思いを表す姿
②　自分から環境に関わり行動する経験	・遊びたい思いを態度や言葉で表す姿

	・遊びの中の役割やすることのイメージが具体的に分かる姿 ・友達と同じ動きをしたり同じ物を身に付けたりすることを喜ぶ姿 ・同じ場で友達と関わって遊ぶことを喜ぶ姿
③　自分の力で考えたり工夫したりする経験	・遊びのイメージや必要な物に気付き、取り入れる姿 ・イメージに合った素材や使い方が分かり、取り入れる姿 ・自分の考えを実現する姿 ・自分の力で取り組む満足感を味わう姿 ・友達に認められ、自分の力を発揮する姿
④　自分のめあてに向かって諦めずにやり遂げる経験	・めあてに向かって取り組み続ける姿 ・めあてを実現し、達成感を味わう姿 ・友達のよさを感じ、認める姿 ・友達と一緒にやり遂げることを喜ぶ姿

イ　自信をもって行動するようになるために必要な経験①～④についてそれぞれ作成した４種類の自立心捉えシートの中から、対象児に必要な経験に適合するシートを選択して、担任と幼児の実態を確認した。自発的な活動として遊びの中で、幼児の具体的な姿を予想し、必要な援助の方法を共有した。次に示すのは、自立心捉えシート「必要な経験その①自分でやりたいことを決める経験」の対象児Ａの例である（表２）。

表２　対象児Ａの姿と対応する自立心捉えシート①の中の幼児の姿

対象児Ａの姿	対応する自立心捉えシート①の中の幼児の姿
・遊びに誘われると参加し、友達の発言や動きに沿って活動する。 ・遊びの中での活動が分かると安心して動く。 ・友達がそれぞれのイメージで動く場面や、遊びをリードする友達が遊びの場を離れる場面では、どう動くか不安になる。	→友達や保育者が誘うと遊びに参加するが、どう動くか分からずその場で立ち止まる姿

(2) 保育記録と考察

自立心捉えシートに示された幼児の姿と、保育者の援助の方針を踏まえ、自発的な活動としての遊びの中でどのように援助をしていくかを想定し、援助を行い、その効果を検証した。次に示すのは検証保育９月の一例である（表３）。

表３　９月の保育計画、保育記録及び自立心捉えシート①を活用した捉え

●予想されるＡ児の姿 ★保育者の援助	○Ａ児の姿　☆保育者の援助	自立心捉えシート①を活用して捉えた幼児の姿と保育者の援助
●遊びをリードする友達が場を離れると動きが止まる。 ★引き出す　示す 周りの友達の思いやイメージを聞きながら、保育者も一緒に動いて楽しみ、動き方のモデルを示す。 ●友達と同じ動きをすることで安心する。 ★認める Ａ児の思いや動きを受け止め、イメージに共感し、安心して思いを表せるようにする。 ●遊びの中ですることが分からない、見付からない。 ★引き出す やりたいことやイメージを言葉にして確認し、明確にする。 ★示す やりたいことやイメージを一緒に考える。	○リレーの場にいるが、その場でくるくる回ったり、腕を揺らしたりする。 ☆保育者が「じゃんけんして勝ったらどっちのチームになるの？」と聞く。 ○Ａ児「勝ったら青、負けたら白。」と答える。 ☆保育者「Ａ児は青だからここに並んでいるんだね。」と声を掛け、並ぶ場所を整理する。 ☆走っている様子を応援したり、走り終わった時に「速かったね。最後まで諦めないで走ったからだね。」と声を掛けたりする。 ○リレーが始まると、バトンを持って走る。走り終わると友達が走る様子を見る時とその場でくるくる回る時がある。 ○２回戦目、友達が「人数を数えよう。」「分からなくなってきた。」とチーム分けに困っていることをリレーの場にいる友達全体に向かって話している間、Ａ児はその場でくるくる回る。 ☆保育者が一緒に人数の整理をしたり、遊びに加わったりして、２回戦を始めるための準備を一緒に行う。 ○２回戦、Ａ児は自分が走る前後でチームの友達を声に出して応援する。	「友達や保育者が誘うと遊びに参加するが、どう動くか分からずその場で立ち止まる姿」 ・引き出す　示す 遊びのルールやリレーを始めるために確認することを思い出せるような声を掛け、モデルとなる動きを示した。 ・認める 最後まで走る姿を認めたり、友達と一緒に走る楽しさを味わえるように声を掛けたりした。 ・引き出す　示す 友達が困っていることを全体で共有できるよう保育者が言葉で伝え、以前のリレーの経験を思い出させたり、モデルとなる動きをしたりした。 →「安心して自分の思いを表す姿」

Ａ児は、リレーが始まる前やリレーの順番を待つ時間に、その場で回ったり腕を振ったりする姿が複数回見られた。この姿を自立心捉えシート①の「友達や保育者が誘うと遊びに参加するが、どう動くか分からずその場で立ち止まる姿」と捉えた。Ａ児の友達が困っていることを全体で共有できるようにしながら、遊びのルール等を思い出せるような声掛けを行った。また、以前のリレーの経験を思い出すきっかけをつくったり、モデルとなる動きをしたりして、遊びを「引き出す」援助をした。遊びの具体的なイメージやルールが分かることで、「安心して思いを表す姿」につながった。

次に示すのは、検証保育 11 月の一例である（表４）。

表４　11 月の保育計画、保育記録及び自立心捉えシート①を活用した捉え

●予想されるＡ児の姿 ★保育者の援助	○Ａ児と友達の姿　☆保育者の援助	自立心捉えシート①を活用して捉えた幼児の姿と保育者の援助
●遊びの中ですることが分からない、見付からない。 ★引き出す やりたいことやイメージを言葉にして確認し、明確にする。 ★示す やりたいことやイメージを一緒に考える。 ●遊びをリードする友達が場を離れたり、それぞれの思いで動いたりすると、動きが止まる。 ★引き出す　示す 周りの友達の思いやイメージを聞きながら、保育者も一緒に動いたり必要な物を準備したりし、動き方のモデルを示す。 ●自分の思いをつぶやいたり、保育者に伝えたりする。 ★認める Ａ児の思いを復唱してイメージに共感し、安心して思いを表せるようにする。	○ごっこ遊びの中で、友達とポップコーンを作り始める。小さい黄色い紙を丸めながら周りの幼児を見る。友達はたくさん作っている。Ａ児は２個目に取り掛かるが、同じ紙をしばらく触っている。 ○Ａ児「キャラメル少ない。」とつぶやく。周りの幼児はその声に気付かない。 ☆保育者「キャラメルのポップコーン少ないなって思ったんだね。確かに、５個しかないよね。」 ○Ａ児「うん。少ないよね。」と保育者の顔を見て言う。 「キャラメルもっといっぱいの方がいい。」 ☆保育者「そうだね。キャラメルもっとあると、ポップコーン屋で売れるね。このキャラメルってどうやって作ったのかな。」 ○友達「茶色の紙で作るんだよ。」 ☆保育者「どこにあるの？」と聞きながら友達と一緒に材料を用意するよう促す。 ○友達がＡ児に作り方を教えながら一緒に作る。 ○Ａ児「やっと作り方分かった。」「これでさくさく作れる。」「キャラメルが一番少ないから。」とつぶやいたり保育者に言ったりしながら取り組む。 ○次第に自分から作り出し、一緒に作っている友達と会話しながら作る。 ☆保育者「なんだかいい香りがする。３人でキャラメルポップコーンたくさん作ったからだね。」 ○Ａ児「こんなに作ったからね。こっちがキャラメルだから。」と自分から保育者に味の説明をする。 ○二日後、必要な物を自分で用意し、ポップコーンを作る動きを友達と楽しむ姿が見られた。	「友達や保育者が誘うと遊びに参加するが、どう動くか分からずその場で立ち止まる姿」 ・引き出す 保育者がつぶやきを受け止め、復唱、共感することで、本児のやりたいことを引き出していった。 ・示す イメージに適した材料の場所や作り方を友達からＡ児に示せるよう、「どこにあるの？」「一緒に探そう。」等保育者が友達にも声掛けを行った。 →「安心して自分の思いを表す姿」 ・認める 自分で作ったことを認める声掛けを行った。

Ａ児はポップコーン作りに取り組むが、ポップコーンを作らずに紙を触り続ける姿が見られ、遊びの中でやりたいことが見付からない様子であると捉えた。保育者は「キャラメル少ない。」というＡ児の気付きのつぶやきを受け止め、復唱、共感することで、Ａ児のやりたいことを引き出していった。また、Ａ児の遊びに必要な材料が置いてある場所や作り方を友達と確認し、自分で作ることができるように援助した。自分がイメージしたことが実現していく楽しさを感じ、自分の思いをつぶやいたり保育者や友達に伝えたりする言葉が増えた。保育者の「引き出す」、「示す」、「認める」援助によって「安心して自分の思いを表す姿」が引き出されていった。

(3) 保育後の振返り

保育後に担任と保育を振り返り、実際に行った援助や幼児の変容を自立心捉えシートで確認した。その中で、幼児の実態の捉え方に保育者間で違いがあった際は、それぞれの捉えを踏まえて幼児の思いを想定し、今後の予想される動きを共有しながら、実態に合った具体的な援助を検討した。

(4) 幼児の変容

９月から 11 月の期間におけるＡ児の変容は、次の３点である。

○　やりたいことを決める経験を積み重ねていくことで、やりたいことが決まらない姿の出現回数が減った。

○　遊びの中でＡ児がつぶやいたことから、保育者がイメージを引き出したり遊びの中の動きにつなげたりする援助をすることで、遊びのイメージが具体化し、やりたいことが見付かるようになった。

○　遊びを通して自分でやってみようとしたり、安心して自分の思いを言葉で表したりする回数が増えた。

自立心捉えシートを活用した検証保育全６日間を通して、幼児は諦めずにやり遂げることにつながる経験を積み重ねることができた。また、保育者は自信をもって行動するようになるために必要な経験をしている幼児の具体的な姿を確認することができた。

(5) 自立心捉えシートの効果

検証保育後に担任の保育者に自立心捉えシートの活用についてインタビューを行った。それにより自立心捉えシートの効果について、以下の２点が明らかになった。

○　自立心捉えシートを活用することで、幼児の具体的な姿や保育者の援助の方法が視覚的に確認しやすく、幼児の実態を捉える手だてとして、また援助の振返りを行う時に考えを整理する資料として活用できることが分かった。

○　保育者の援助の方法が構造化されていることで、他の保育者と具体的に共有することができた。

第４　研究の成果

本研究の成果は、次の２点である。

○　自立心捉えシートを保育前に活用することで、保育者間で幼児の実態や必要な保育者の援助を共有しやすくなることが明らかになった。

○　自立心捉えシートを保育後の振返りの際に活用することで、複数の保育者が捉えた幼児の姿を共有して幼児の実態を把握し、実態に合った援助を行いやすくなることが明らかになった。

上記２点を踏まえて援助を行うことで、幼児は必要な経験を積み重ねることができ、自信をもって行動する場面が増えた。

第５　今後の課題

本研究の課題は、次の２点である。

○　自立心捉えシートによって明確になった保育者の援助をより効果的に行うために、幼児の姿を踏まえつつ、援助を行う適切な場面やタイミングについても研究を進めていくことが必要である。

○　小学校教員と幼児の成長を共有する際の手だてとして、自立心捉えシートを活用し、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の一助となるよう、実践を継続していく。